

世田谷文学館

収蔵資料

調査と探究

03

横溝正史  
海野十三

## 目次

横溝正史と海野十三

日下三蔵

資料写真1

横溝正史日記〈昭和10年、23年、30年、32年〉

インタビュー1

父と娘の日記からたどる、横溝正史の面影  
野本瑠美

資料写真2

海野十三 横溝正史あて書簡

〈昭和21年4月14日～23年10月31日〉

インタビュー2

海野十三と家族の記憶

坂井陽子、鈴木江利

父の思い出

佐野暢彦

資料翻刻1

横溝正史日記〈昭和10年、23年、30年、32年〉

資料翻刻2

海野十三

横溝正史あて書簡〈昭和21年4月14日～23年10月31日〉

横溝正史／海野十三 略年譜

# 横溝正史と海野十三

日下三蔵（SF・ミステリ評論家）

本書は、世田谷文学館が所蔵している横溝正史の未刊行日記と海野十三から横溝正史へ送られた数多くの書簡を翻刻していく企画の第一弾である。

横溝正史は本格推理小説、海野十三はSFと、現在は独自の発展を遂げている各ジャンルの基礎を築いた重要作家であり、その素顔が垣間見える今回の資料は、それぞれの作家のファンのみならず、ミステリに興味のあるすべての読者にとって、第一級の内容といっていだろう。

横溝正史が成城、海野十三が若林と、ともに世田谷区在住だったために、ご遺族から寄贈されたものであ

る。その一部は、二〇二五年四月から九月まで開催された「海野十三と日本SF」に展示されたが、やはり肉筆の文章を、短時間ですべて判読するのは困難であったから、こうして活字に起こして刊行してもらえるのは、本当にありがたい。

横溝正史は昭和四十年代に角川文庫に入った旧作が爆発的に売れたことで、作品の映画版、ドラマ版も大ヒットし、国民的ともいえるブームを巻き起こした。

金田一耕助は日本でもっとも有名な名探偵となり、二〇二六年の現在でも、マンガ化やドラマ化が相次ぐ

ほどだが、実はブームの頃には、還暦を超えて古稀に近い老大家であり、著者のキャリアの中では晩年に当たるのだ。（巻末の年譜参照）

横溝正史は一九二一（大正十）年に「恐ろしき四月馬鹿」でデビューしており、これは江戸川乱歩が「二銭銅貨」で登場するより、二年も早い。しかし、デビュー当時、薬学専門学校の学生だった横溝正史は、卒業後も家業の薬屋で働きながら、たまに筆を執る兼業作家であり、まだアマチュアといっても良かった。

江戸川乱歩のデビューがエポックとなって、次々と探偵小説を手がける作家が現われ、国産ミステリは大正後期から昭和初期にかけて、大衆小説のジャンルとしての地位を確立していく。

乱歩の勧めで上京して博文館に入社し、「新青年」などの編集に携わることになった横溝青年は、間違いなくその中心人物のひとりであった。

入社翌年の一九二七（昭和二）年には、早くも森下雨村の後を継いで二代目編集長に就任。同誌の摩登ニズム路線を押し進める一方で、作家としても活躍した。本格推理だけでなく、サスペンス、怪奇小説、ユーモア小説、コントから翻訳まで、この時期の作品は極めて多彩である。

一九三二年に博文館を退社して作家専業となるが、翌年に結核を発症して咯血。三四年七月から信州上諏訪での療養生活を余儀なくされた。この時の資金は、水谷準をはじめとする仲間の探偵作家たちが、すべて出してくれたという。

三五年、上諏訪で書いた畢生の傑作「鬼火」（「新青年」二〇三月号）でカムバックを果たし、三六年から旺盛な執筆活動を再開する。

本書に収められた三五年六月から九月にかけての日記は、この上諏訪時代のもので、体調や病状についての記述が、頻繁に登場するのが痛々しい。

七月二十四日以降、「面影双紙」「蔵の中」「鬼火」などの作品に手を入れているのは、この年の九月に春秋社から出る短篇集『鬼火』のための修正作業である。その他の収録作は、「講談雑誌」九月号に発表されたばかりの「獣人」とトム・ガロン作「視機械倫敦綺譚」の計五篇。

この日記で目を惹くのが、書き継がれている「火蛇」という作品の存在である。第一回四十五枚とあるから、連載小説と思われるが、著作リストには該当する作品がない。第二回までは完成して、第三回を執筆しているが、なんらかの事情で未発表に終わったのか、ある

いは雑誌に掲載されたのに、誰にも気づかれぬまま埋もれているのか、見当がつかない。

いずれにしても、百枚近い分量が、実際に書かれていることは事実なので、未完だったとしても、ぜひ読んでみたいものだが、こればかりは発見される奇跡を待つしかない。

ここで、既刊のエッセイ集に入っている、横溝正史の日記について、まとめておこう。

A 探偵小説昔話（新版横溝正史全集18）75年7月 講談社

桜日記

桜日記に寄せて 新稿

B 横溝正史の世界 76年3月 徳間書店

続桜日記「幻影城」76年5月増刊号

C 横溝正史読本 76年9月 角川書店

日記（昭和四十年）

昭和四十年の日記について 新稿

D 真説金田一耕助 77年12月 毎日新聞社

七六年八月二十二日から七七年八月二十日までの日記（抜粋）

このうち、「桜日記」は一九四六（昭和二十一年）「続桜日記」は四七年の日記である。タイトルは、横溝正史の疎開先が、岡山県吉備郡岡田村字桜だったことに由来する。「続桜日記」以外はすべて未発表で、これらの単行本で初めて公開された。

AとBは中島河太郎編、Cは小林信彦編。CとDは角川文庫にも収められたが、文庫版では日記は割愛されていた。

現在では、柏書房で私が編んだ《横溝正史エッセイコレクション》（全三巻）に、元版のまま収録。ただし、Dの単行本では、毎日新聞の連載エッセイ「真説金田一耕助」と日記の抜粋が交互に配置されていたので、柏書房版では、エッセイパートと日記パートを、それぞれまとめておいた。

近年では、二〇二四年四月の「別冊太陽 探偵小説の鬼 横溝正史 謎の骨格にロマンの衣を着せて」（平凡社）には、「特別公開 横溝正史の「日記」として、昭和二十一年、二十二年、二十三年の日記が、それぞれ見開きで紹介されている。

二松学舎大学の山口直孝教授による特集解説は、「簡潔な生活記録——横溝正史の日記」。というか、この「別冊太陽」自体が、山口先生の編まれたものであった。

本書を皮切りとした翻刻シリーズは、現存する横溝正史の日記から、これまで公刊されていない部分を、年代順に収めるものである。

四八年一月から十月までの日記は、疎開先の岡山で書かれたもの。執筆中の作品として、「読物時事」の「黒蘭姫」、「月刊読売」の「びっくり箱殺人事件」、「男女」の「夜歩く」などのタイトルが見える。

一月十一日の項目で、かもめ書房が「黒猫」掲載誌の「小説」を送ってこなかったと怒っているが、これは金田一ものの「黒猫亭事件」の初出タイトル。この時期、イヴニング・スター社から「黒猫」という探偵小説誌が出ていたので、紛らわしい。

二月四日の項目で友人への献本の手配をしている。『暗闇劇場』（22年8月／一聯社）、『双生児は踊る』（22年9月／民書房）、『罨』（22年10月／隆文堂）、『本陣殺人事件』（22年12月／青珠社）、『蝶々殺人事件』（23年1月／月書房）と、毎月のように著書が刊行されているのが凄い。

横溝正史が岡山から東京に戻るに当たっては、海野

十三からのひとかたならぬ力添えがあったのだが、その詳細については、後段の海野・横溝書簡の解説で述べることにしたい。

四八年の日記で特筆すべきは、少年向けミステリの戦後第一作『怪獣男爵』（偕成社）が、書下し作品であるという従来の定説が裏付けられたことだろう。

一般向けの単行本と違って、児童書では雑誌連載か書下しかといった書誌データが明記されていることは稀で、『怪獣男爵』も状況から見ると十中八九、書下しと思われるも、確定事項ではなかった。そのため、戦前の旧作を改稿したものである可能性を指摘する声もあったが、今回の資料で、偕成社のための書下し長篇であったことがハッキリした。

五五年一月から二月までの日記で、「墮ちたる天女」「蜃気楼島の情熱」「湖泥」などを改稿しているのは、東京文芸社《金田一耕助探偵小説選》のための手直しだろう。

この年には十月からスタートした大日本雄弁会講談社の《書下し長篇探偵小説全集》に『仮面舞踏会』で参加するが、ついに完成せず、六二年から「宝石」に連載を開始したが、これも七回で中絶した。

しかし、七四年十一月、横溝ブームを受けて発刊さ

れた講談社《新版横溝正史全集》で書下しの第十七巻として『仮面舞踏会』は、ようやく刊行された。当初の予告から、ほぼ二十年が経過していたが、横溝正史はこの作品を忘れていなかったのである。

五七年四月の日記に登場する角川書店《現代国民文学全集》はA5判函入で、細かい活字の三段組のシリーズ。そのため、第八巻には、江戸川乱歩『孤島の鬼』、木々高太郎『人生の阿呆』、横溝正史『八つ墓村』と、長篇が三本も入っているのに三百八十ページしかない。

七一年四月に『八つ墓村』が角川文庫に入ったことで、爆発的な横溝ブームが巻き起こるのだが、それより十四年も前に、角川書店の文学全集に『八つ墓村』が入っていたのだ。

電気試験所で無線通信の技術開発に従事していた佐野昌一は、一九二八（昭和三）年、海野十三の筆名で『新青年』に「電気風呂の怪死事件」を発表し、探偵作家としての活動を始めた。

奇想横溢の探偵小説を書き継ぐ一方で、科学者ならではの知見を活かした本格的な科学小説にも意欲を示し、数多くの作品を残した。

探偵小説に「振動魔」「爬虫館事件」「三人の双生児」

たので、海野が人気作家となっていく過程に伴走したのは、三代目編集長の延原謙と四代目編集長の水谷準であった。

ただ、当時は探偵作家の人数が少なく、仲間意識は強かったから、本書の横溝の三五年の日記にも、海野のエッセイを読んで病気の心配をしたり、新著や手紙のやり取りがあったことが記されている。

両者の間で頻繁にハガキや封書が交わされるようになったのは戦後のことで、海野が横溝一家の疎開先の岡山に手紙を出したことから、毎日のような文通が始まったという。

探偵作家クラブ会報の海野追悼号に寄せた横溝のエッセイ「断腸記——海野十三氏追悼——」には、こう書かれている。

私はちかごろ、朝の郵便をうけとることにしよげかえる。毎日きまつてどいた、海野さんの、筆で書いた、あの達筆の手紙が見られないからだ。こゝ三年、海野さんの手紙は毎日必ず一通は来た。どうかすると手紙とハガキがいつしよに来ることがあった。二日もとぎれたかと思ふと、三日目に三通そろって来た。日附を見ると、ちゃんと毎日書いてみられるのである。

「深夜の市長」「蠅男」、科学小説に「地球盗難」「十八時の音楽浴」「生きている腸」「放送された遺言」などがある他、少年向けの科学冒険小説でも、たいへんな人気を博し、「海底大陸」「太平洋魔城」「火星兵团」などの作品を発表している。

しかし、なかなか科学小説を手がける作家は現れず、海野は念願だった科学小説時代の到来を見ることなく、四九年に結核で世を去った。

五七年に星新一がデビューすると、小松左京、筒井康隆、豊田有恒らがこれに続き、国産SFは新たなジャンルとしての独立を果たした。マンガの世界でも、手塚治虫を筆頭に、藤子不二雄や石森章太郎（後に石ノ森章太郎）らが積極的にSF作品を発表していく。

ここに名を挙げたクリエイターたちは、いずれも少年時代に海野十三を愛読し、SFへの夢と憧れをかき立てられていた。海野が蒔いた種が、巡り巡って大きな花を咲かせたのである。現在、海野は「日本SFの父」と位置付けられており、生まれ故郷の徳島県には、その業績を讃える碑が建てられている。

一九二八（昭和三）年に海野十三がデビューした時の「新青年」編集長が横溝正史である。しかし、半年も経たないうちに「文芸倶楽部」に異動になってしまっ

横溝家は疎開に当たって吉祥寺の自宅を人に貸していたが、戦後のことで、戻るから出ていけとも言えず、困っていたところ、杉山書店の社長が成城に家を見つけてくれたという。

早稲田大学に入学した長男の亮一氏が、上京した際に海野邸に挨拶に行き、事情を伝えたところ、その家はぜひ買った方がいいと、筆筒預金から購入資金を立ててくれた。海野のおかげで、横溝家は都内に戻ってくる事が出来たのである。

海野夫人の佐野英さんが追悼文集『横溝正史追憶集』（82年12月／私家版）に寄せた「追憶」には、このようにある。

今となつては昔の話になりますが、横溝さん御一家が疎開先の岡山県から今の成城のお屋敷に御上京なさったのは、思えば若葉のかほる頃でした。御長男の亮一さんが早稲田に入学を機に是非御上京なさるよう、毎日の手紙に海野は御すすめしておりました。

その頃は海野は朝起きて、仕事をする前には必ず横溝さんに御便りを書く習になつておりました。机の上によさしい字の横溝さんの封筒を見る事が一日の生活のよろこびになつていたのです。

# 資料写真1 横溝正史日記

昭和10年、23年、30年、32年

上 昭和30年2月、愛犬カピと  
下 昭和11年、療養先の上諏訪  
にて。紙飛行機を持つ横溝の両  
脇に長女・宜子、長男・亮一  
※上下とも写真提供：二松学舎大学



希望していたように、横溝さん御一家が御上京なさったその数日後、乗物に恐怖のあった横溝さんが水筒にお酒を入れて、成城から若林まで歩いてみえられました。私が横溝さんにお目にかかったのはそれが初めてでした。

横溝さんには海野が「新青年」に掲載出来るきっかけをつくって頂いたお話がよく聞いておりましたが、私に記憶がなかったのでしょうか。あんなに毎日手紙の往復した方がその時初めてのお目もじとは、いまでも不思議に思うのです。

海野はさらに、鎌倉にいた延原謙にも、世田谷に家を手配して呼び寄せたという。「新青年」グループの友情の厚さを感じるエピソードである。

また、海野の没後も横溝家と佐野家の交流は続き、横溝は定期的な収入になるように、海野の少年ミステリの出版をポプラ社に斡旋した。実際、同社から出た『美しき鬼』『少年探偵長』『超人間X号』などの海野作品は何度も版を重ね、一九七〇年代半ばまで新刊と

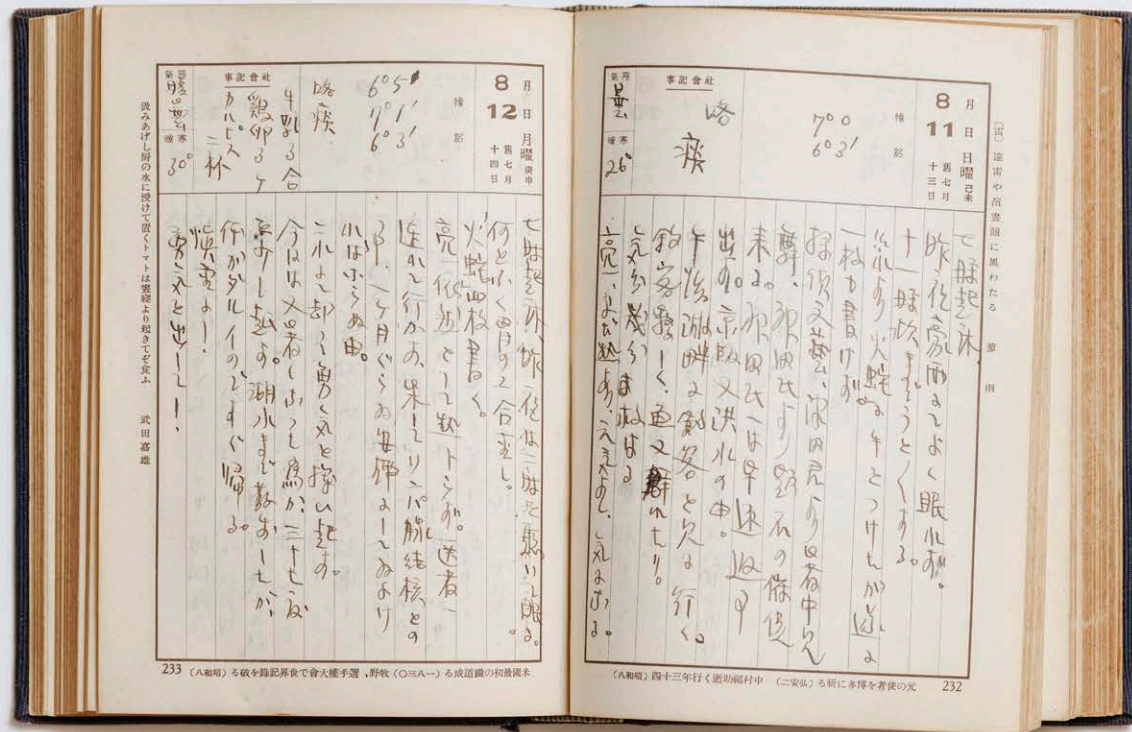
して入手可能であった。

そういえば、海野の死去によって中絶となった連載作品のうち、『未来少年』は高木彬光、『美しき鬼』は島田一男、『少年探偵長』は横溝自身が後を引き継いで完結させたが、その手配も横溝によるものだったという。

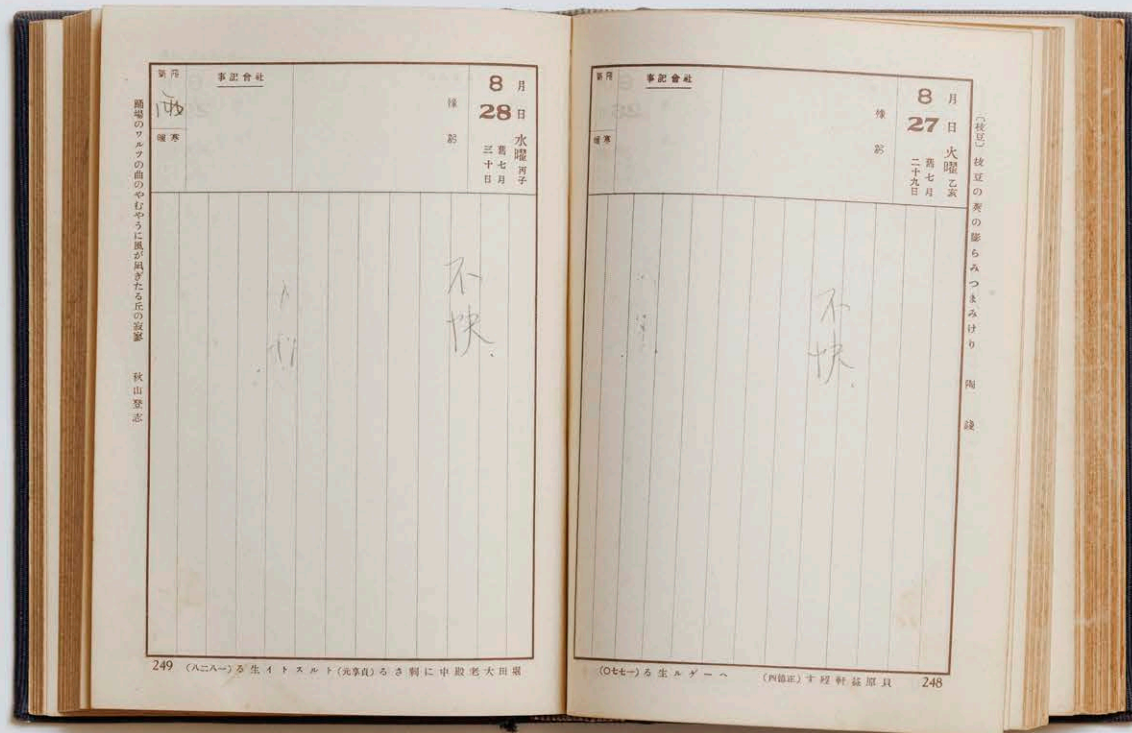
横溝・海野往復書簡については、前掲の「断腸記」の他にも、自伝エッセイ「続・途切れ途切れの記」や「日本探偵作家クラブ会報」掲載の追想エッセイ「日本文」などで、くり返し触れられているから、ファンにとっては有名であった。

しかし、七十年以上も前の、まして私信である。目にする機会が訪れるとは想像もしていなかっただけに、現物が展示されているのを見たときには、大いに興奮した。同じ思いのミステリファンの方は、私以外にも多いと思う。

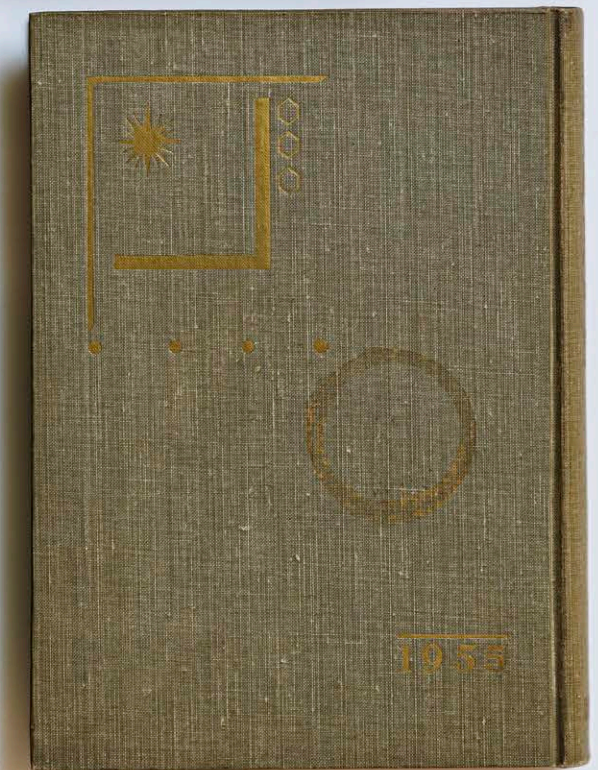
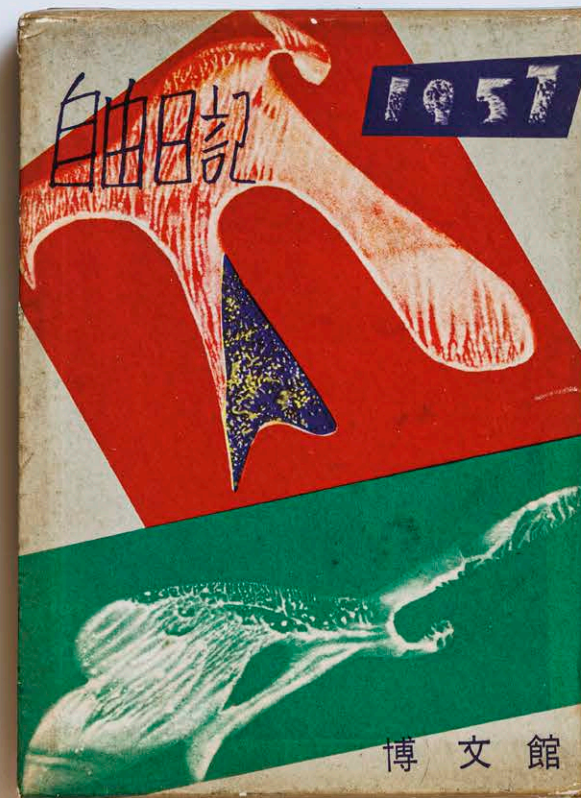
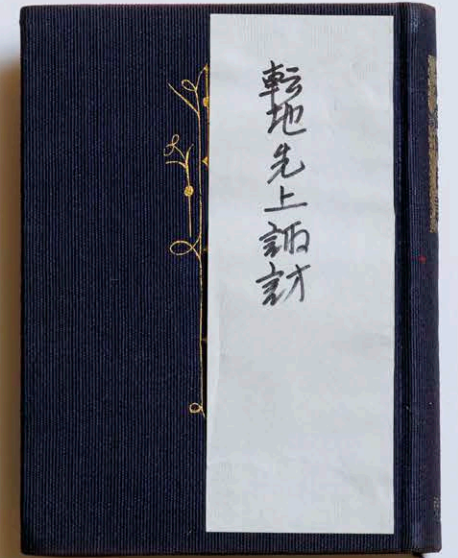
さらに、こうして活字化されて手軽に読めるようになることは、奇跡といっても過言ではない。今回の出版に関わった両家のご遺族の皆さまと世田谷文学館の方々に、心から感謝したい。



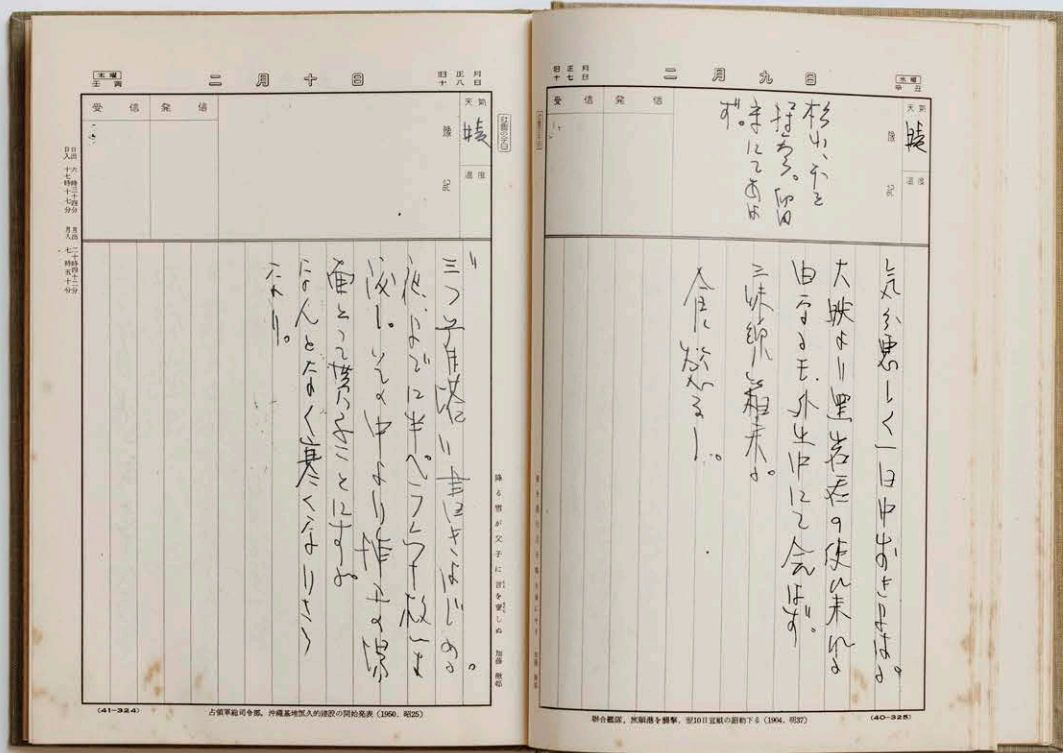
昭和10年8月11～12日の日記。12日の末尾には「慎重に！勇気を出して！」と己を鼓舞するかのよう書き綴っている



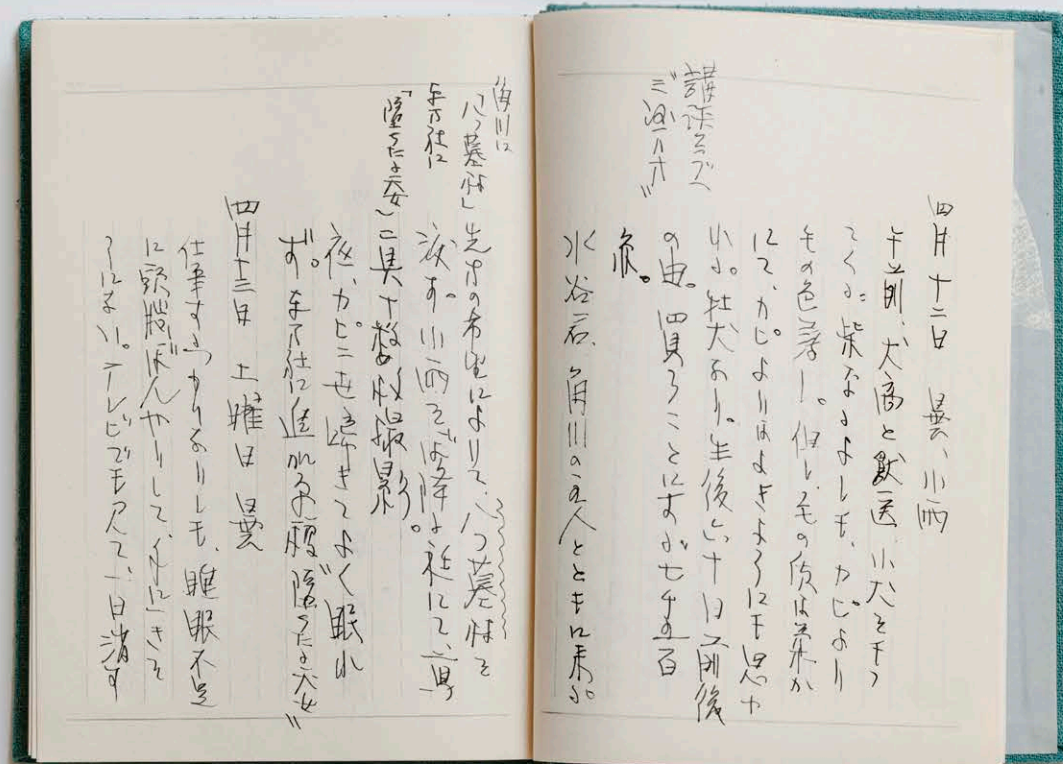
昭和10年8月27～28日の日記。8月19～31日はほとんどが「不快」の記述のみ



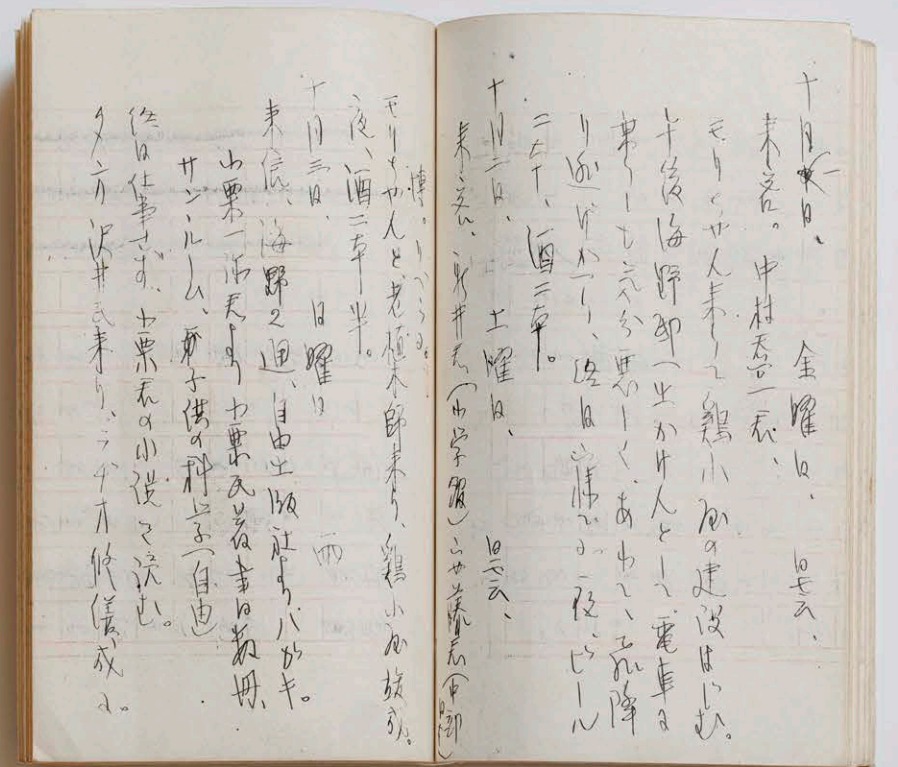
右上：昭和10年の日記、左上：昭和23年の日記（使い古しの原稿の裏を綴じたもの）、  
右下：昭和30年の日記、左下：昭和32年の日記



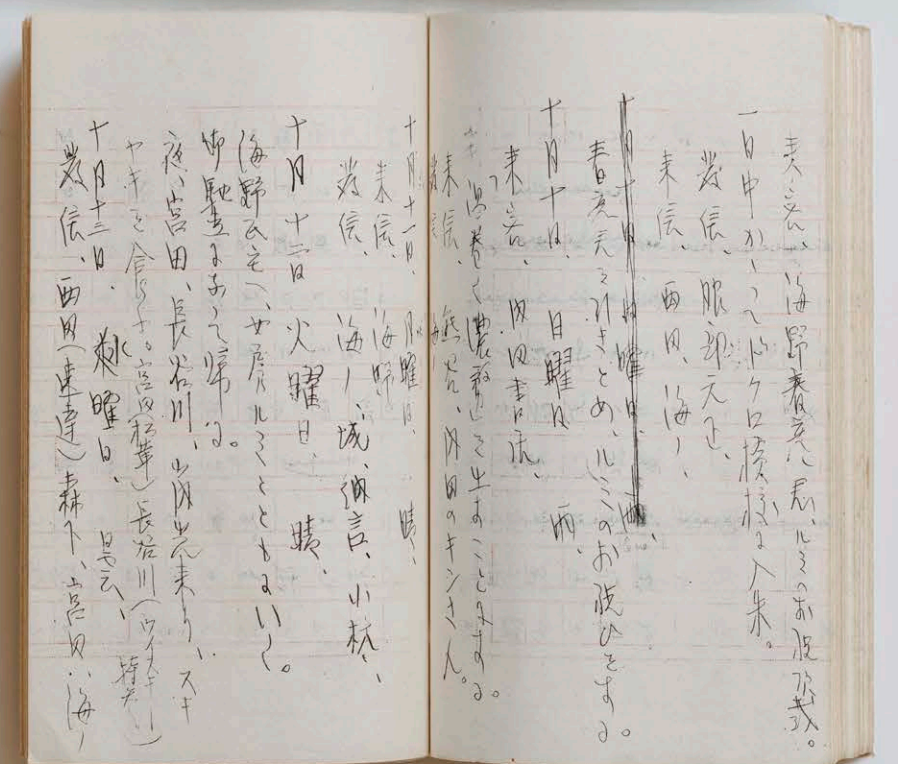
昭和30年2月9~10日の日記。10日に「三つ首塔」の執筆を始めたことが書かれている



昭和32年4月12~13日の日記。子犬を迎えた日のこと



昭和23年10月1~3日、成城の家で記された最初の日記



昭和23年10月9~12日の日記。12日には海野十三宅へ夫人とともに出かけた様子が綴られている

## 父と娘の日記からたどる、

## 横溝正史の面影

野本瑠美氏（横溝正史次女）

野本瑠美  
児童文学作家。1939年、横溝正史の次女として長野県に生まれる。慶應義塾大学文学部哲学科卒。著書に児童文芸新人賞を受賞した『みたいなみたいな冬の森』（文芸の森社）、近著に『父、正史 母、孝子』（KADOKAWA）がある。

《頭の中のパズルを崩してはいけない》

——本日はありがとうございます。今回翻刻を掲載しました横溝正史日記と、そして今日お持ちくださった瑠美さんの小学生時代の日記を手掛かりに、お話を伺っていききたいと思います。まず、1948年の横溝日記（P47〜67）ですが、この年の夏に、疎開先の岡山から成城に引越してこられたんですね。

岡山に疎開する前は吉祥寺に住んでいました。父は1932年に出版社を退職して、退職金で大正浪漫風の家を建てたんです。玄関のドアにはステンドグラスが嵌っていて、とても素敵な家でした。2階は全部個室で、応接間には大きな電気蓄音機と、ポータブルレコードプレーヤー。モーツァルトやベートーヴェンのシンフォニーのレコード

もたくさん本棚にあって。岡山へはその応接セツ

トも全部持つて行ったので「これは疎開じゃなくしてお引越した」っていわれました。でも無蓋車っていう屋根のない貨車に乗せられてしまったもので、本がみんなびしょびしょになってしまいました。カビたりもして、ずいぶん本を失いました。

岡山の家は、六畳間の上りと、八畳の父の寝室と、書齋に使った八畳間と、兄の部屋にした三畳間と、四畳半のお茶の間があるきりで、お台所は土間にお竈（へっつい）でした。それから車井戸。そんな家でしたから応接セツは使っていなかったんですが、東京に戻るとなって、それが次々と出てきたの。岡山の家には梯子段で上がる屋根裏があつて、そこに仕舞っていたんですね、よく天井が落ちなかったと思います。電気蓄音機やプ

レーヤーは出してあつても、父が執筆をしている

と聴けないんです。音楽が大好きな兄は、押し入れにポータブルプレーヤー入れて、毛布をかぶって音が漏れないようにして聴いていました。頭から湯気が出るように暑いのに、それでも音楽が聴きたくて。父は眠っているとき以外は四六時中集まっている人ですからね。黙ってるとか静かにしてるとか言う人じゃないんですけども、父の気迫というのかしら、そういうのに押されて、静かにしていなさいいけないという家庭の掟みたいなものがありました。足音さえ立てられません。

食事のときも、途中で考え事をして、お箸から何か落ちても気が付かないんです。温かいうちに食べたほうがおいしいものも、箸にぶら下げたままじーっと考えている。とにかく頭の中は小説で

いっぱいだね。物語の最初から終わりまで頭の中で全部組み立てちゃうんですよ。書きながら考える人じゃないんですね。パズルを全部頭の中に組み立ててしまう。だからそのパズルを崩しちゃいけないという感覚が、家族全員にありました。食事

も別で、一緒に食卓を囲むのはお正月三が日の朝だけです。ご飯を食べる時間ももつたいないから、錠剤3錠飲めばお腹がいっぱいになってエネルギーが出るようなもの、そういう、今でいうサ

プリメントみたいなのがあればいいのにつづつと言っていました。

ステーキ、鰻、お寿司、すき焼きとか、エネルギーが出るものばかり食べるんです。母の手料理も好きなんですけど、間に合わないんですよ。急に書き出したり急に食べたいうって言い出したりするから、作っている暇がない。だから母は幕の内弁当をよく作っていました。呼ばれたらお重に詰めてぱーっと持って行く。夜中も書くので、母はずっと起きてついでにしているわけです。夜中でも食べたいといえどもまた作って。食べないと、お腹がすいてエネルギーが出ないんですね。真っ赤に燃える汽車の罐（かま）に石炭を放り込んでいるみたいでした。

でもステーキも鰻もお寿司も、家族は食べられなかったんです。父だけ特別。子どもには別に手取りのものを出していました。お寿司屋さんが「こんなにしょっちゅう注文するなら、もう庭先に店を出させてください」って言うの。成城の家の前は東宝撮影所に行く人たちも通るので、ここに店が出せたら先生が食べなくても売れるからって。お店は実現しませんでしたけれど、5月の父の誕生日にガーデンパーティーをする時には、お寿司屋さんが来て握ってくれました。

——執筆のためのエネルギーとしての食事だったんですね。お母様のご不在時には瑠美さんが作る

こともあつたとか。当時小学4年生の瑠美さんの日記にもあります。

「お昼ちよつと前にお母さまがおつかいにいったのでじつとおこたつにあたつていた。なかなか帰らないので雪だるまと雪うさぎをつくった。手がつめたくてじんじんするのでおこたつにあたつていたら、お父様が「おい」とよんだのでいったら「ほんとゆつたのでこまっしてしまった。お母様はまだ帰らないといった。またすこししてからまたよんだのでいったら「はらがへった」といった。私はありあわせでしようと思つて、ちよつとまつて、といつて、お台どころえいって、戸だなをあけたらなにもないのでけさのおみおつけをぬくめてそれからごはんむしにごはんを入れてぬくめた。おつゆだけしかないのになまたまごどほしじかなをやいてまにあわした。」（1949年12月27日）

そうでしたね。そんなふうには、ともかく常に食べる物には困らないように気を付けていました。疎開せず東京に残った方から食べる物に困っていると聞いたので、成城の家でも作物を育てました。引越してきて最初に植えたのが「陸稲」。お米一俵分とれたの。家族総出で稲刈つてね。父は岡山では肥たごを担いでいましたから、畑仕事していれば健康だと思つたのかしら。でも自分はほとんど農作業しないんですよ。父の日記には岡山で



昭和20年終戦前後、岡山の疎開宅の縁側にて。左から長男・亮一、正史、妻・孝子、次女・瑠美、長女・宜子（写真提供：二松学舎大学）

何を植えたとか、東京で畑やったとか書いてありますけど、陣頭指揮をとるわけでもなくて、ジャガイモ植える時にもちよつと穴掘って埋めるくらいでね。少しでも胸に障るとすぐ咯血しますから。成城は植木屋さんの土地だったので広い庭がありましてね。落花生とかいろいろ植えました。だんだん食が足りるようになってから、母がイチゴを植えて。お米一俵とれる土地にイチゴ植えたら大変な騒ぎなんですよ。毎朝毎朝熟しちゃって、とるのが大変。編集者の方々からお見舞いにいたたくフルーツバスケットのカゴにイチゴを詰めて、ご近所に配って歩くのが私の役目でした。残りはジャムにして瓶詰めをいっぱい作りました。それからフルーツバスケットに入っているレモンも、絞って蜂蜜を入れたものを父がとても喜んで、1日に5個も6個も搾って飲むんですよ。すると今度は皮ばかり残るから、母がマーメイドにしましてね。レモンのマーメイドは、私も、私の娘も孫も作ります。庭のスタチとか夏みかんとかでも。母の工夫が今に続いているんです。

### 《戦時中の横溝家》

戦争中は干し芋をよく作りました。ナントカ売号という美味しくないお芋をふかして、木綿糸で切りましてね。屋根に上って瓦に並べて干すわけ。

「九時ちよつとすぎて目がさめたので本をよんでいたらガタガタとゆって電気がゆれだしたのでじつと見ていたら、じしんのだいきらいなお父様がじしんだじしんだとゆってとびでてきたので私もびっくりしてよぎをひたたくって外えとびでた。お母様もとびだした。」(1949年12月26日)

寝巻のまま父は飛び出すでしょ。冬ですとね、火鉢もって飛び出すんです。自分の手あぶり用のこんな小さな火鉢をもって。そうすると母は、自分は寝間着のまま、父の着る物をもって飛び出します。私は次に毛布をもって飛び出す。だからもう癖がつかましてね、夜寝る時は自分の洋服をたたくで枕元に置くようになります。父は地震だけでなく、雷も火事も大嫌いでしたね。でもそういうことが起きると、普段静かにしてなければならなかった家で唯一みんなでキヤーキヤー騒ぐことができたので、楽しかった、嬉しかったという思いもあります。

### 《海野十三との交友》

——今回の翻刻には入れられませんでした。海野十三さんからの書簡にも「地震がそんなにお嫌いとは、おどろきました」との記述がありました。海野さんとの交流についても伺います。横溝日記に海野さんのお宅に行ったことが書かれています

それを大きな缶に入れて防空壕に保管して、防空壕で食べたりしてね。吉祥寺の家の近くに中島飛行場というのがありまして、そこに爆弾が落ちると防空壕にばらばらと土が落ちてくるんです。兄は防空壕にポータブルプレーヤーを持ち込んで、私が怖がらないようにとレコードをかけてくれました。

中島飛行場は飛行機を製造していたので、そこを目標にB29が来るんです。家の近くでかなり低空飛行になる。見えるんですよ、飛行機のお腹がね。兵士の顔が見えるくらい下がってくる。そうすると父がね、ベートーヴェンの「田園交響曲」の雷鳴の部分がありますでしょ、すごいところ。そこを電気蓄音機で最大音量でかけて、B29に向かって「わかるか、この芸術がわかるか!」って叫ぶんです。戦争と芸術との戦いでしたね。父は決して戦争反対とか口で言う人ではないけれど、心では絶対反対。戦争を激励する小説は一切書きませんでした。ですから食べていくのが大変でした。乾信一郎さんから勧められて書き始めた捕物帳が、戦地の兵隊さんの読み物として喜ばれるので慰問袋に入れてもらっていたんですが、人形佐七と妻のお糸との色っぽい会話からイカンと言われて、それで捕物帳も書けなくなりました。自由に物が言えないということは、本当に怖いこ

が(P66、瑠美さんの日記にも登場します)。

「今日私は海野のおじちゃんちへお母ちゃまと二りでいきました。私は五つめのわかばやしでおりてはたけの中や、竹やぶの中を歩いていきました。おじちゃんのうちの門にひょうさつがたくさんならんでいるのでよくわかりました。」(1949年1月3日)

表札がたくさん並んでいたというのはなぜかわからないのですけれど、ご本名とペンネームが掛かっていたということかもしれません。お名前といえれば私も、「うんのじゅうぞう」さんと言っていたんですよ。正式には「うんのじゅうぞう」さんというらしいですね。

海野さんと父との仲というのは、乱歩さんとの仲ともまた違ったかたちでした。海野さんとは、父が「新青年」時代に、海野さんの作品を父が認めて、それからのご縁ですね。戦時中には海野さんは大変な人気作家になったんですが、父は戦時中は書きませんでしたから、収入がほとんどなかったんです。東京に帰りたくても、吉祥寺の家は国策によって強制疎開者が入居したままになっていて、成城の家を紹介されたけども買えない。兄が東京の大学に受かりまして、海野さんのところにご挨拶に行ったときに、家は見つかったけれど買うに買えないといったら、僕が工面する

とです。

することがないから、その頃父は編み物ばかりしていました。父は40歳、私はそのとき3歳で七五三の年だったんですが、着物なんて買えるご時世じゃないので、代わりに赤い毛糸でワンピースを編んでくれました。それもフリルがいつぱい付いたフリリリの。それはほどこいてカーディガンに編み変えてしまったんですが、今も大事にとっているのは、半袖の白いレーシーなセーター。刺繍も父がしたんです。あれは編み物のエキスパートの人もどうやって編んだんでしょうというような困難な編み方らしいですよ。不思議ですね。婦人雑誌を見て、網目記号通りに編んでいたんですが、ちゃっちゃかちゃっちゃか編むんじゃないの。一目ずつ、針に糸をかけて。それでもいつの間にか編みあがってくる。でも考えごとをしていて目を落したりすると、パーっと全部ほどこいちゃうんですよ、もつたない。後年、なんで当時編み物をしてたのか聞きましたら、「原稿用紙に一字一字書くのと、一目一目編むのと似ていたから」と言っていました。

——横溝先生と編み物の組み合わせは意外に感じますね。意外といえば、地震がひどくお嫌いだったとか。地震嫌いのお父様について日記に書かれています。

からと言って資金の3分の1くらいお貸し下さったんです。とてもご親切にしてくださいました。岡山にいるときにはたくさんお手紙をやり取りしましてね。きれいな筆の字で、子どもながらにこなぎれいな字を書くのはどんな素敵な方だろうと思っていたんです。初めてお会いしたとき、ああ、その通りの方だと思いました。とてもお優しい方で。同病(結婚)ということもあって、乱歩さんとも違った親しさがあつたようです。

岡山には一日三通も海野さんからの手紙が来ることがありました。検閲があつたので、何通かまとめて来るんです。三通来ると三通分父が返事を書くわけ。そうすると姉が郵便局まで自転車で行く。日文矢文って父は言っていたけど、あれが本当に、父を激励してくれたものだと思いますね。ひとり孤立していましたからね、でもその孤立がまた父の栄養になったと思うのです。おそらく東京にずっといたならば、いろんなお付き合いとかもあつて、その上食糧難もあつたでしょうから作品をじっくり考える時間はなかったと思いますね。

——さきほどの日記ではお母様と一緒に海野家に行っていますが、その翌週にはお父様も一緒にいらしています。

「またお父ちゃんとお母ちゃまと海野のおじちゃんの家えいきました。いったらのぶひこさん

とまさひこさんとようこねえちゃんがいきました。はるひこ兄ちゃんはまだ学校から帰っていませんでした。お母ちゃんやお父ちゃんもお話をしていました。私はようこねえちゃんなんかとランプをしていました。帰りお父ちゃんが電車ののるのがいやになったので歩いて帰りました。たけやぶやはやしやおみやのところをとうりしました。もう月あかりだけだったのでとてもよかった。」(1949年1月10日)

この時と、それから海野さんが亡くなる寸前の時(5月14日)と二度、海野さんの家(松陰神社前)から成城まで歩きました。行きは豪徳寺で玉電に乗り換えて行ったんですけども、父は乗り物恐怖症でもあったから。よく父は道がわかったものだと思いますね。暗い中、一時間以上歩いたはずで。月明りの中、成城の桜並木の影が黒々としていて、それを踏んだら地獄に落ちてしまうような思いをしながら帰ったのを覚えています。

### 《江戸川乱歩は競争者》

——横溝日記と瑠美さんの日記を見ると、出かけていくのは海野さんと乱歩さんのお宅だけですね。ご自宅にはたくさん作家仲間が集まっていたと伺いました。

成城の家は最初はガスコンロが2つだけの粗末

の時に電報一本で東京に来てって言われて。でもその時もう母と婚約していたんです。母は薬剤師のところにお嫁に来るつもりだったのが、作家になっちゃったわけですね。作家仲間はみんな呑ん兵衛で、集まっては車座になって呑むわけですから、母は「私は山賊のところ嫁に来たのか」って言っていました。母は医者の家で育って、みんな下戸だったから呑ん兵衛なんてものを知らなかったそうです。父が24、母が21で結婚して、それですぐ父は博文館で編集長になったのですが、その頃にアメリカやイギリスのミステリー、探偵小説をたくさん読んで、吸収していました。そのこともあって、日本の小説はこのままではいけないという思いがあったようです。

### 《日本らしい探偵小説を書く》

渡辺温さんという、父と一緒に博文館で仕事をしていた編集者がいたんですが、事故で若くして亡くなってしまった。温さんがもし健在だったら、父はああいう小説を書くような人にはならなかったと思います。温さんは非常にモダンで、伊達で。探偵小説はロンドン、ニューヨークを舞台にした横文字ばかり読んで。温さんと一緒だったら外国ものの焼き直しのような小説を書いていたかもしれない、本当に仲良しでしたから。なんでもシル

な台所だったんですが、お客さまがいらっしやるようになって改造しました。大工さんが熱意を込めて、まるで今のシステムキッチンのようにしてくれて。倒れそうな日本家屋なんですけど、キッチンだけはピカピカ。父が、食器棚の色は瑠美に任せるからというので、私が好きなペーパージントグリーンに塗ってもらいました。明るいキッチンで、ダストシュートまで作ってくれたんです。ストンと入れると下にあるバケツに入るようになっていました。立派なオープンもつけました。大きな電気冷蔵庫も三越まで母と買いに行きました。食器も20人分近くの魚河岸に買いに行きました。魚屋さんが、そんな大勢のだったら魚河岸に買いに行けばいいよって教えてくれて。まるで魚屋さんのどんぶりみたいな、分厚い、不格好な食器を山ほど買ってきました。同じ大工さんに折り畳み式のテーブルを2つ作ってもらって、それとお座敷の朱塗りの座卓を3つ並べて。父の体調が良いと、十五、六人もお客様がいらっしやっていたものですから。

——乱歩さんが急にいらした日のことも日記に書かれていました。

「今日は、金曜日なので、ピアノなのでかみをゆっていたら電話がかかってきた。江戸川のお小父ちゃんがくるんといってきた。いそいでおそ

クハットに燕尾服で慶應に通っていたという方です。父はカンカン帽に白いパンツとブレザーで銀座を闊歩していて、そんな仲間毎日遊び暮らしていましたからね。

探偵小説は都会でなければ成り立たないと、母にずっと言っていたらしいんです。それもあって疎開をするのは嫌だったようなのですが、姉が勤労動員されていた中島飛行場に大爆撃があって九死に一生を得てから考えを変えると共に、瀬戸内海の島々の小説を書きたいというのがあって、疎開しました。そうしたら、実は岡山は、横溝家の先祖の地だったんです。親戚付き合いは面倒くさいから親戚筋のあたりとは少し離れたところに住んだんですけどね、ところが、どうも「横溝家の顔」っていうのがあるらしいんですよ。村の人が「あれは横溝家の顔だ」って言っているのって、バレたわけ。余所者じゃないってわかったことで、一気に仲良くなりました。

加藤一さんという、父の作品も読んでいたインテリなお百姓さんがいて、村のゴシップなんかをいろいろ聞かせてもらったんです。それと、田舎には家柄というものが因習的に残っていることに気が付いた。あの時代の都会でそんなこと考えないで暮らしてきた人が初めて気が付いたんです。それで、日本らしい探偵小説を書くって覚悟した

うじをしたり机えをだしたりした。もう新宿に来ていたので大いそぎだった。もうすぐきてしまった。お小父ちゃんがきてごあいさつだけしてピアノにいった。ピアノから帰って、おぎしきにいった。火ばちにあたったらいくとき一っほんしかたばこがさきつていなかったのにひばちのまわりに三とうりぐらいでとりまいていた。灰おとしがあるのに火ばちばかりにいられた。お父様もだいい火ばちにさしていた。帰るまでたばこばかりすっていた。ごはんをすませていたらこんどはおかさけをあまりのまないのでとてもあまいものがすきだった。」(1950年1月13日)

乱歩さんは父にとって、競争者でした。乱歩さんが目標で、尊敬する先輩、追いつきたい存在。乱歩さんがいなきや書く気が起きないんです。乱歩さんは「宝石」の編集とか、皆さんをバックアップしたり、まとめたり、そういうことに能力を発揮されて、だんだん書かなくなってしまう。それがくやくしてくね。「何とか書いてほしい、そうしないと僕の目標がなくなるから」って。酔っ払うと夜中に「乱歩の馬鹿野郎！」って怒鳴るんです。「乱歩さんが書いてくれないなら僕は書けない」なんて言いながら泣くような人でした。

父が18歳の時に乱歩さんと出会って、24歳



昭和22年11月、乱歩一行が疎開先の岡山の家を訪ねてきた時の写真。左から瑠美、乱歩、西田政治、正史、鬼怒川浩(写真提供:二松学舎大学)

のか、これで書けるって思ったのか。ですから、父は不思議な人です。ピンチがあると、チャンスがめぐってくるように努力する。ピンチをピンチのままにしない人でした。ね。「ピンチがチャンス」っていうのは我が家のモットーですが、努力をしないとチャンスは来ないということもあわせて、父に教わったのだと思います。

——ありがとうございます。

2025年6月17日収録

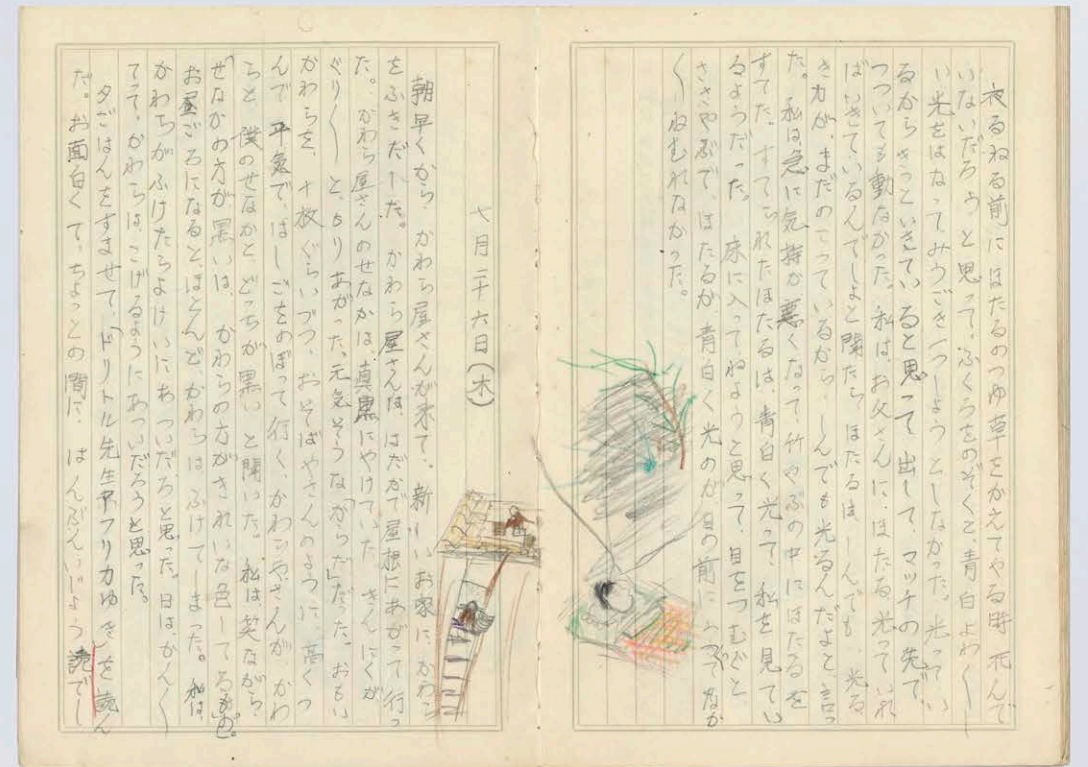
昭和21年4月14日  
23年10月31日

# 資料写真2

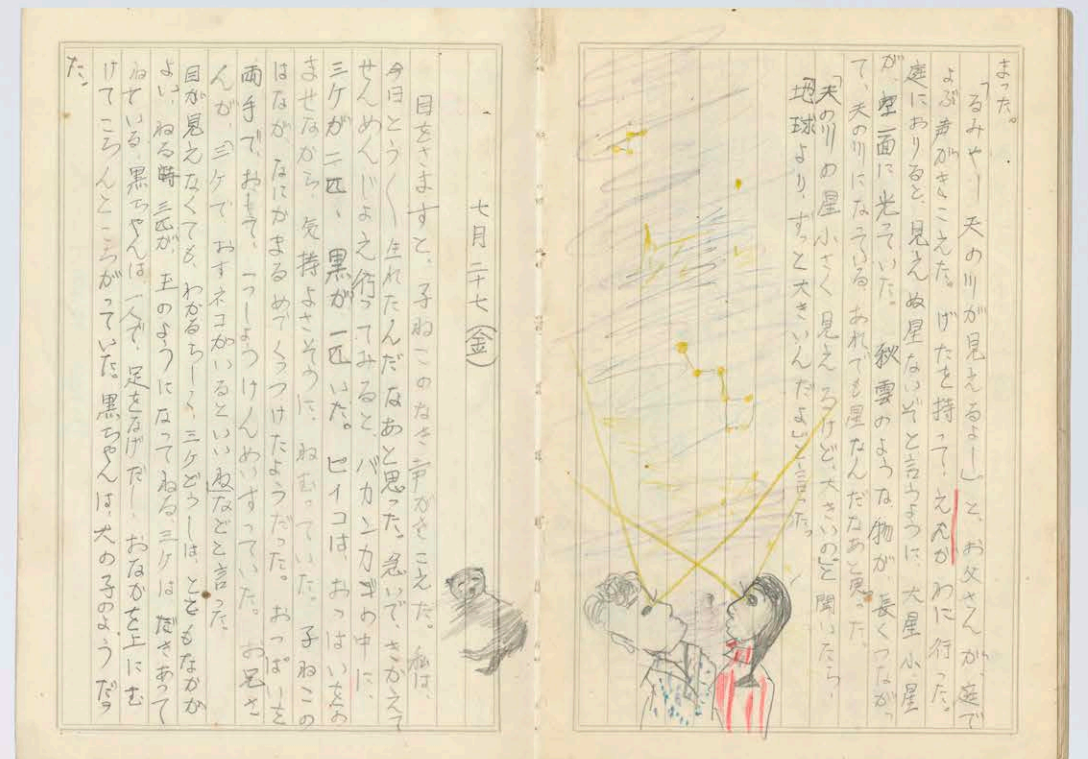
## 海野十三

### 横溝正史あて書簡

昭和23年10月23日、海野宅にて。  
左より海野、西田政治、横溝正史

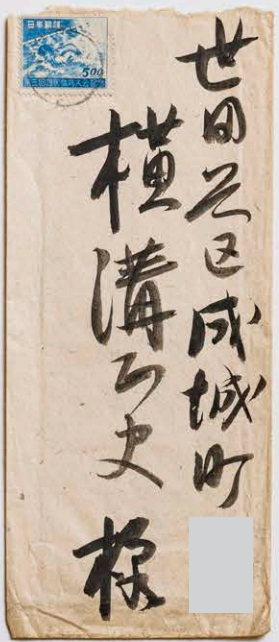


瑠美さんの1951年(昭和26年)の日記から  
(右)7月25日。蜜は死んでも光るよ、という話をお父様から聞いて、眠れなくなってしまったこと。(左)7月26日。瓦屋さん came こと



(右)上段の続き。お父様と天の川を見上げたこと。(左)7月27日。子ねこが生まれたこと





十月廿二日  
 あんといよ 暖かいせい、  
 物も元気にまはるに  
 とまよとばかり、  
 ヤリあやました。十五枚と十枚  
 そーそ夕方にあった、これはヤリ  
 すぎたあと、後悔し、  
 何一も持ちこしの行儀、  
 三三山精し、  
 いりゆるる、明日一杯は火のな

病も者のひまもなしといふに  
 身。ふんて因果であらう。し  
 づ門島し終る命と決りまし  
 た。そーそ希われの余韻、  
 こ下に感じたり、陰さるる教  
 人、はちわるとんが明に尺  
 え、大足のいひ、  
 キのちむひ、  
 おおゆをくらすつて快まをええ

大と、三  
 大と、三  
 見ゆさ。まよとに感じたりまし  
 た。そそ、  
 今り、  
 正史大見  
 十三

「インタビュー2」

# 海野十三と家族の記憶

坂井陽子氏 (海野十三次女)

鈴木江利氏 (海野十三次男・暢彦氏の長女)

## 《渡り廊下の図書室》

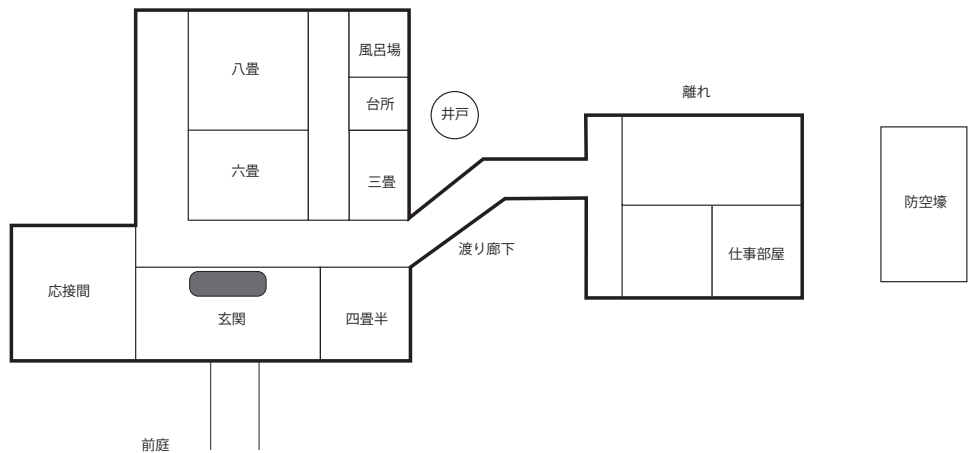
「きょうは、お父様の思い出についてお話を伺っていきたいと思います。ご家族はご両親とお姉さまの朝子さん、陽子さまの下に晴彦さん、暢彦さん、昌彦さんと坊ちゃんたちが続くのですね？ お父様がご自宅で執筆されるのでさぞ気を使われたのではないのでしょうか。」

坂井 5人も子どもがいますからね、うるさいものだから太平洋戦争が始まるころには母屋のほかから離れを作ったので執筆してました。離れまで6、7メートルの渡り廊下があって、そこに書棚を作って「おまえたちがいつでも本が読めるように」ってぶ厚い百科事典がたくさん置いてありました。親戚がくると、「おじさんのところは本がいっぱいあっていいね」と喜んで見ているんで

すが、私たちは外で遊んではかりました。門から入ると小道があって両開きの玄関から一段上がります。玄関が結構広かったです。はじめは母屋で書いていたと思うのですが、子どもたちがうるさいので、離れを作ることになったんです。

鈴木 私が高校生になるまでこの家がありました。平屋で大きな玄関と応接間、六畳と八畳、三畳の部屋があって、お風呂、台所。台所の後ろから離れがあったようです。応接間は洋風で縁側がありました。離れは私が物心つく頃にはもう無くなっていました。庭がかなり広がったです。戦争中はカボチャを作っていて父はもう一生分食べたといっていました。

坂井 (家の間取り図を見ながら) 離れは八畳と六畳、四畳半だったかな。三部屋の一番奥を書斎



《海野十三郎間取り図》 ※坂井陽子氏・鈴木江利氏からの聞き書きを元に世田谷文学館が作成した

昭和23年10月22日の書簡。横溝の「獄門島」(「寶石」昭和22年1月~23年10月連載)最終編を読んだ感想が述べられている



左から英（海野十三夫人）、三男昌彦、海野、長女朝子、前左から次男暢彦、長男晴彦、次女陽子。1938年、自宅庭にて

にしていました。ここが防空壕です。広さがあるので食料を入れておいたりしました。庭では戦争中は畑を作りました。かぼちゃ、南京豆、トマト、いろいろ作りました。二百坪くらいあって、庭では鬼ごっこでもかくれんぼでも泥遊びでも友だちはみんなうちに来て遊んでいました。でも「今日はお父さんいるからうるさいのだめよ」と言われると、どこかへ遊びに行ったりしてました。

### 《仲が良かった両親》

坂井 父はやさしくて、母は元気で、いつも張り切っていました。父にはいつもちゃんと御馳走が出るんです。食道楽っていうんでしょうか、お酒

は飲まなかったけど、おつまみみたいなものが好きで、子どもたちもみんな好きで、父から「食べるか？」なんて言われるとお茶碗出していました。——こちらはご家族全員で撮影なさった写真ですね。

坂井 私は弟たちがいたから男の子みたいでね、この自転車はね、暢ちゃんがこっちに乗りたいというから私が譲って、私はこっちの木馬に乗ってふくれているんです。いまでも恨んでいますよ（笑）。男の子たちはとても仲がよくていつでも一緒なの。

父に関してはへえーって驚くような話題が多いんです。「今日はテレビが映る実験をやってきたよ」とか子どもたちに話してくれるんです。計算もすごく好きでした。父の実家はご典医だったから数学が好きだったんだと思います。新橋で特許事務所を開いていましたが、いつから小説を書くようになったか私にはよくはわかりません。絵が上手で、風の絵を描くと武者絵なんか売っているものよりも上手なんです。四国から出てきて神戸の中学へ、そこから早稲田大学に行っただけで結婚する前は浅草に住まいを構えていましたから、そのとき見たものを子どもたちに作ってやっていたんだと思います。

二子玉川に遊園地ができて、雑誌「少年倶楽部」



自宅縁側にて、左より海野、暢彦、晴彦、英夫人

えで、私たちにはお小遣いを絶対くれなかった。お祭りにいっても駄菓子屋さんでもなんにも買えないの。だから抗議したことありますよ。最後にはねえやさんが一緒に行ったときは買ってもらえるようになりました。でも、新橋のお寿司屋さんには何回か連れて行ってくれたことはあるのよ。暢ちゃんだったかな、アナゴを好きで、「ぼっちゃんそんなにアナゴばかり食べたらなくなっちゃうからほかのにして」なんて言われたことがありました。食べるときは食べさせるの。

### 《無線ラジオで戦況の情報を集める》

——海軍報道班員として海野さんはラバウルに行かれますが、結核を再発して帰ってこられますね。戦中戦後のことで印象的な思い出を聞かせていただけますか。

坂井 僕は戦争に一番に行きます、って感じでした。それで太平洋戦争が始まってまもなく真つ先にラバウルまで船に乗って行っただけです。姉の旦那さん（長女・朝子さんの夫は海軍軍人）や兵学校を終えたばかりの若い海軍士官の方たち6人くらいの方たちと一緒に戦争に勝つつもりで意気揚々として出かけていきました。けれどラバウルは灰が降るから、そこで胸をやられてしまいました。昭和17年のお正月から行って、5月に帰って

きました。一緒に行った海軍の方たちには戦地でよくしてくれてありがとって、目黒の雅叙園でごちそうしたりしていました。若い軍人さんたちがよくみえるので、近所の人たちがうらやまがりました。そういう若い方たちと知り合いになったのが、父としては楽しかったんじゃないかと思っています。

終戦の年の3月の空襲のあたりから電気がすぐ停まるようになったんです。そうしたら無線機みたいなラジオで一生懸命ニュースを聞いてね、ほら、世田谷文学館の展示にも写真があったでしょう？ 聞いたニュースは塲のところに張り出していました。隣組の人たちが正しい情報を知らないといけないからと言ってね。「俺はほんとうのニュースが聴けるから」と言っていました。

戦争が終わるとページ（実際には公職追放の仮指定）になってしまいました。本人も身体が悪くなつて家に引つ込むようになったでしょう。そうすると家にはいろんな方がいらっしやいました。廊下のことちの六畳からそつと覗くとどなたがいらしたかがわかる。延原謙さんや大下宇陀児さんはよくいらっしやって、母がおもてなしをしていました。横溝（正史）さんがいらっしやる時は何かもってきてくださる、父は電気のこと小説のことわかるから、どういうふうにしたら出版

の車が三軒茶屋まで迎えに来てくれて、私たちに遊園地の楽しさを経験させてくれたことがありました。私は車に酔っちゃうからいやだつて言ったんだけど「お受けするのがエチケツトだ」つて言われて出かけました。気持ち悪くなっちゃうから頂いたお菓子も食べられなくてね。

両親は電気試験所で知り合つて、お互い気があつて仲が良かったみたいです。茨城から来たねえやさんが2人いて姉妹なのね。両親は私たちをねえやさんたちに任せて神戸や箱根に出かけちゃうんです。「お土産買ってくるわね」と言つて、何日か泊まつて帰つて来るんです。私たちは遊ぶのに忙しくて文句も言わず、お土産を待つていました。両親は子どもたちにはぜいたくさせないという考

できるかご相談に見える方も多かつた。有名な方もいらっしやいましたよ。よく覚えてるのは、学生服を着た手塚治虫さんです。真直角にお辞儀なさつてね、まだ学生さんだけど本を書く人だよつて聞きました。

### 《勉強できるうちは勉強しなさい》

坂井 父の具合が悪くなったところ、私は初めて父に「女学校を5年でやめると、もう一年（新制）



行灯ラジオを発明したころ

高校っていうところへいくのどうしたらいいですか」って相談しました。そうしたら「これからいろいろな事習った方がいいから勉強は続けなさい」って言われました。その頃は学校に残る人のほうが少なかったんですが、6年まで行って、それから先は、好きな大学へ行けばいい、っていうことになったんです。でも父が（昭和24年）5月に亡くなってしまって、その先は母がしたいことをやりなさいって、ドレスメーカーに3年間行って23歳で結婚しました。父は勉強できるうちは勉強しなさい、大学も行ってほしいという思いがあったのでしようが、母は早くお嫁に行つたほうがいいという考えで、若い私はどちらに行つたらいいか悩みました。父がもう10年生きていてくれたら私の将来も変わつていたと思います。

### 《父の突然の死と母の偉さ》

坂井 父が亡くなったときは悲壮でした。急だっ

たんです。私は高校3年生でしたが、驚いて青くなってしまいました。かかりつけの先生もすぐに来てくださったんですけどね。私はその場にいません。上の弟は六畳の部屋に座り込んで出てこない。二番目の弟も出てこない。三男の昌ちゃんも近くにいました。私はお姉さんだから弟たちを静かにさせなきゃって思っていました。

だんです。「これおいしい水だから」って。3日3晩寝てなかったから、こっくんと寝ちゃったんです。

鈴木 父は明るいことが好きな性格だったのですが、そのときは誰にも見つかからないように押し入れに入つて泣いていたそうです。

鈴木 祖母は祖父から「僕は50歳までしか生きないよ。だけどお嫁さんになってほしい」と言われたそうです。「ほんとうかなと思つたけれど、ほんとうにそうなつちやつた」って祖母は言っていました。祖父は予期していたのかもしれないですね。

坂井 母は何があつてもちゃんとしていました。延原（謙）さんの奥さんが母をさすりながら「みんながいるから、手伝うから」と言つてくださったけど、それどころじゃなかったですね。横溝さんはじめ、みなさんがたくさんいらしてくださいってお通夜は徹夜でした。六畳と八畳の部屋を使つてにぎやかなお葬式でした。母はお酒とお寿司の支度をしてね。このとき、私ははじめてお酒飲ん

2025年5月27日収録

## 父の思い出

佐野暢彦（海野十三次男）

今でも父のことを想うと父の端正な顔が浮ぶ。父の所作には威厳があった。昨今では家族は皆友達になつてしまつたので父親が一人『孤独に耐えて凛とした風格を持つ』などすつかり影をひそめた。

父は「自分のことは自分でしなさい、人に頼るな」「節約に努めムダをなくせ」「どんな人にも敬意をもって接し礼節を忘れるな」「何事にも好奇心をもて」「どんなことでも平易に説明しなさい」、それができなければ己の理解が不十分だと思ひなさい」などよく言われたが、ついぞ「勉強しなさい」とは言わず、成績を見せても何も言わなかつた。

太平洋戦争も末期になり日本の戦況は日増しに悪化していった。学童を戦火から守るために学校は父母に集団疎開か緑故疎開かを選択するよう通達がなされた。父はそれをいつまでも決心しなかつた。父に、学校から急がされているので早くと頼んでやつと緑故疎開にしようとした。早速家の引越の整理を始めた。家族総出で整理に没頭したが整理は遅々として進まず、ついに父は『疎開するなど全く無理だ』とサジを投げた。家族一同はその決断に安

堵した。あたりを見廻すと家財が散乱していた。その中に書物が山のように積み上つておりその片付を始めるのは沢山の英文の書籍が出てきた。英語の本と雑誌であつた。英語も分らなかつたが雑誌を手にとつて見ると何やら面白そうな挿絵や絵がありしかもカラー刷であつた。本は厚くページをめくるとあちらこちらに赤と青のエンピツで書き込みがあつた。筆跡から父のものだと思つた。その頃戦時中で英語などは使うなど、音楽の音階でさえ、信じられないことだが「ドレミファソラシド」ではなく「ハニホヘトイロハ」になつていた。そんな中で父はこんなものを読んでたのかと驚いた。これらの書物は結局土を掘つて作った防空壕に収めたが、そののち雨水が浸水し、だめになつたのは残念なことであつた。父の小説のヒントになつたのであろうか。

昭和十九年（一九四四）を過ぎると空襲はますますはげしさを増した。父は何を思つたのか兄（十二才）と私（十才）をつれて、前日の猛空襲で未だ戦火の残る本所・深川から上野・浅草方面に徒歩で探索した。道路には市電の架線がたれ下り折れ曲つて道を

封鎖していた。子供を抱きかかえたまま黒こげに焼けた死体が道端に放置されていた。あたりを徘徊している人々の顔は火傷で髪は焼け焦げでこの世の事とは思えぬ光景であった。隅田川には逃げ遅れた人たちが飛び込んだのであるう人々が死体となって川面に浮いていた。公園に引き上げられた死体は大きく掘った穴の中に投げ込まれていた。見てはならぬものを見た気持でうつうつと長すぎる時間をすごした。疲れ果ててやつと駅までたどり着いた。その間父は終始無言であった。父に声を掛けることもできぬほど言葉を封印する威圧があった。父は我々に何を教えたかったのだろうか。

父は我々兄弟が生まれるとそれぞれの写真を撮り、出生から成長の過程を写真帖に収めた。それに、皮表紙の日記帖にはその時々父の思いをこめた寸言を書き留めていた。残念ながら年月を重ねると共に散逸し今は兄弟誰れも、数枚の写真を除いて、持ち合せていない。記憶にあるのは『父は五十までしか生きられない、だから写真と言葉を残す』と書き残していたことであった。

ある日父は私を呼んで『横溝さんの家を訪問するがお前もくるか』と言いつつ父と共に横溝家へと向った。昭和24年（1949）5月15日だった。母は父の体調を気遣いハイヤーを呼んで送り出した。父と共に家族で出掛けることはよくあったが私だけを連れてのことは始め

てであった。横溝家では大変な歓待を受けた。父は横溝さんと話はずんでご機嫌であった。父は、酒はビールならコップ一杯、清酒なら猪口で三杯が精一杯であった。かたや横溝さんは大変上戸であったが二人共意気投合している様子であった。夜もかなり深まり宴を終えた。それではと立ち上ると外は春の雨がかなり強く降り始めていた。不覚にも父は天気良好であったので車はすでに帰していた。それを知ってすぐ車を呼びますからとのご親切なご配慮があったが父は帰りは久し振りに電車と考えていますからと再三の申出にも強くご辞退した。それでは亮一（横溝氏長男）さんをお宅まで同行させますとのことで父はそれがありがたくご好意を受けた。外に出ると春にしては強い雨で温度はかなり下っていた。ふと父の身体にさわりがいいか、との思いが頭をかすめた。結局亮一さんにご同伴いただき無事その夜家に安着した。

その翌日から父の具合が悪くなったのであろう。翌日の夜、父の部屋の雨戸を締めるのは私の毎日の役目であったのでいつもの調子で雨戸をガラガラと締めると部屋の中から障子越しに『雨戸はもう少し静かに締めなさい』と父の叱咤の声が聞えた。

その夜半に父は大咯血し母が泣きさけぶなか咯血が喉につまって窒息死した。享年五十一才であった。

※徳島県立文学書道館文学特別展「生誕一一〇年記念 日本SFの父 海野十三展」図録（2008年）より転載